

〈書評〉

河原 典史著

『カナダにおける日本人水産移民の歴史地理学研究』

(古今書院、2021年)

庭山 雄吉

この本を手にした時に、タイトルにある「日本人水産移民」という言葉に興味をひかれた。カナダの日本人移民、特に初期においては、漁業のイメージが印象深い。その理由としては、バンクーバーの南郊にあるサケ漁の中心地であったスティーズトンが、多くの日本人移民をひきつけた場所であったからであろう。著者は、先行研究で看過されてきた点を指摘しつつ、サケ漁のみならず、他の魚種を含めた総括的な「水産業」という観点から本書を纏め上げた。本書は、全9章で構成されている。各章の内容を追いながら著者の主張を要約してみたい。

第1章「はじめに—カナダ日本人漁業移民史の再考—」においては、これまで等閑視されてきた移民研究の領域を指摘し、本書における水産移民史の位置付けを示している。先行研究においては、サケ缶詰産業の中心地であったスティーズトンに偏向することを指摘している。これを踏まえ、本書ではさまざまな理由で日本人移民が移動した「拡散的・二次的移住」(12頁)に着目する。加えて、サケ缶詰産業から独立した日本人移民の活動やサケ類以外の魚種についての研究が希薄である点が示されている。著者は、日本人移民は漁撈のみならず、漁獲物の加工や流通、さらには造船業にも従事し活躍していたため、「漁業」ではなく「水産業」と称するほうが適切であると主張する(6頁)。

第2章「研究の目的とその歴史地理学的アプローチ」では、「水産移民」に関する著者の独自性が提示されている。サケ缶詰産業だけではなく、捕鯨業、塩ニシン製造業、さらに造船業を含む「水産移民」として日本人移民史を考察することが本書の目的であると記されている。本書の独自性について、以下、大きく4点に纏められている。①自由移民としてサケ缶詰産業を中心とする漁業に携わった日本人移民についての検討。②時間と空間のスケールに留意しつつ歴史地理学からのアプローチをもとに「水産移民」を検討。③陸上の漁村と海上の漁場とを相互補完的に考察。④個人家所蔵の資料を含めたさまざまな資料の積極的活用(20-21頁)。資料については、主に大縮尺図、日本人住所氏名録、

Fire Insurance Plan (火災保険図)、Directory (英語住所氏名録) が用いられている。さらに本書においてたびたび登場する日本人移民の日記・手記をはじめとするライフヒストリーに関連する貴重なデータが活用されている。

第3章「カナダ日本人移民史の概略」では、カナダへ渡った初期の日本人移民の歴史が概説されている。カナダへの移住は、アメリカ合衆国やブラジルとは異なり、農業よりも他の生業に関わることが特徴的であることを指摘している。最初にカナダへ移住した日本人は、1877年に渡加した永野萬蔵である。1888年には、和歌山県日高郡三尾村(現・美浜町)出身の工野儀兵衛がステューブストンへ渡り、その後続く移住の礎を築いた。日本人移民の多くが水産業に従事したが、炭鉱夫や鉄道保線工として従事する者もいた。ハワイでは、1898年にハワイ王国がアメリカ合衆国に準州として併合された後、アメリカ合衆国本土への移動を希望する日本人移民が増加した。しかし、アメリカ合衆国では日本人移民に対する排斥感情が強かったため、カナダへの入国希望者が増えた。さらに、日本からは1907年に契約移民として約1,500名がカナダへ送り出された。バンクーバーでは日本人街が形成され、紐帯を維持した。

第4章「サケ缶詰産業をめぐる日本人移民」では、キャナリーと呼ばれるサケ缶詰工場とその関連施設における日本人移民の役割について論じている。さらに同章においては日本人移民と他民族との関わりが記されている。キャナリーで働く人々の居住について、日本人には簡易住宅、中国人には二段ベッドが並ぶ寝台舎、インディアン(先住民)には小屋があてがわれていた点は興味深い。日本人の場合、単身の出稼ぎから妻子を呼び寄せた家族単位での生活が必要であったため住宅があてがわれたのであろう。著者は、フェニクス・キャナリーとアランデル・キャナリーとを比較検討し、サケの種類別の缶詰生産量や従事者の民族構成を明らかにした。注目すべきは、日本人移民はフェニクス・キャナリーでは、製造所と漁船の両方の部門で従事しているのに対し、アランデル・キャナリーでは、ほぼ漁船の部門で活躍していたという点である。

第5章「捕鯨業をめぐる日本人移民」では、カナダにおける捕鯨業と補完的労働力として重要な役割を果たした日本人移民との関わりについて論じられている。日本人移民の中には、春から秋にかけての繁忙期に季節的な移動を行い、捕鯨業に従事した者もいた。捕鯨に関する経営はイギリス系が担い、直接的な捕鯨はノルウェー系が担当し、日本人移民は補完的労働力として主に鯨油採集を任された。英語ができる者は、主任に任命され諸作業の指示を担った。19世紀末から20世紀初頭にかけて、カナダ北西岸において、いくつかの捕鯨基地が設置された。グラハム島北端のネーデン・ハーバー捕鯨基地とモレスビー島の南東端にあるローズ・ハーバー捕鯨基地に就業したそれぞれの日本人移民とその家族に着目し、ライフヒストリーをもとに綴られている。興味深い点は、カナダ移住の先駆者として知られる永野萬蔵が、ローズ・ハーバー捕鯨基地と関係していたこ

とである。永野萬蔵は食料品店を経営しており、同基地の日本人移民へ食料品や生活用品を送り取引をしていた。このように遠方ながらも日本人移民の緊密なネットワークが機能していたことが確認できる。著者は、カナダ水産界への日本人移民の貢献について再検討する必要があると指摘する(139頁)。

第6章「塩ニシン製造業をめぐる日本人移民」では、カナダ水産界では重要視されなかった塩ニシン製造業について論じている。ニシン漁はバンクーバー島と北米大陸との間のジョージア海峡が漁場となり、漁期は前期(10月初旬から12月末)と後期(1月初旬から3月初旬)の2期に分かれている。19世紀末より開始された塩ニシン製造業は、1923年頃に最盛期を迎え、一時的には日本人漁業者の独占的な産業となった。当時のカナダでは、魚肥としての加工や魚卵(カズノコ)の採取が禁止されていたため、塩漬けされたニシンが日本へ輸出されていた(157頁)。日本人経営者は、日本人移民の他、スカンジナビア、ユーゴスラビア、イタリア出身の労働者を雇用していた。ニシン巾着網漁業にかんしては、調査報告書からの引用や個人所有の古写真をもとに漁獲方法について克明に説明がなされている。そこでは、魚群の発見とその後の漁獲について明確な分業システムが構築されており、協同体制がとられていた。

第7章「バンクーバー島西岸における漁村の開拓」では、ユクルーレットおよびトフィーノをはじめとする漁村における日本人移民を対象としている。多くの日本人移民が定住したスティーブストンからの二次的移住については、これまでほとんど論じられなかった分野であり、それ故、著者の研究に関心が注がれる。二次的移住とは言うものの、希望する土地に自由に移動できたというのではなく、カナダ政府による漁業ライセンスの厳しい制約がある中での移動であった。二次的移住が促進された要因として主に漁船の動力化と新たな漁場の発見が指摘された。同章では、ユクルーレットの女性たちや子供たちにも焦点があてられ、日本語学校の様子など、当時の生活史が生き生きと描かれている。このような寒村においても教育や娯楽のある日本人移民の堅固なコミュニティが構築されていたことは、注視すべき点である。

第8章「漁業を支える日本人」では、これまでの研究において看過されてきた造船業に着目し、主に船大工の活動に焦点をあて、「水産移民」としての漁業との密接な関わりについて論じている。19世紀末に画期的な革新である漁船の動力化がすすみ、これに伴い漁船を管理・維持できる人材が求められた。しかし、スティーブストンで認められた動力船使用の許可は、日本人移民が目指すカナダ北西部のスキーナ・ナース川下流地域では認められていなかった。カナダは、ようやく1931年に日本人漁業者に対して動力船の使用を認めた。これを契機に、造船技術を修得した人材が急務となった。著者は和歌山県出身の向井精四のライフヒストリーを紐解きながらスティーブストンの造船所について論考する。1909年に向井精四は船大工の家に生まれ、自身も船大工の道を歩んだ。日

本では明治 30 年代後半から漁船の動力化が普及したとされる。彼は、造船技術だけでなく動力についても知識があり、カナダにおいても活躍した。同様にとりわけ和歌山県南部出身の船大工がカナダへ渡った。本章の後半では、都市部のみならず漁村までも手広く事業を展開した丸野吉太郎・栄三郎親子に焦点をあて、丸野商店のはじまりから事業拡大の経緯について詳細に描かれている。

最終章である第 9 章「水産移民の分業システムとネットワーク」では、これまで個別に議論してきた水産業における分業体制および居住空間について俯瞰的に考察している。日本人水産移民史について、著者独自のモデル図をもとに移動および居住空間について説明している。移動モデルにおいては、サケ缶詰産業、塩ニシン製造業、サケ一本釣漁業、捕鯨業での日本人水産移民の移動形態について示されている。居住空間モデルにおいては、キャナリー、ニシン・キャンプ、開拓漁村、捕鯨基地について空間的に居住地が提示されている。漁撈のみならず造船業や加工・流通業を含めた水産業においては、複数の民族・出身国による国際的分業システムが構築されていた。日本人水産移民が、この国際的分業システムに組み込まれながらも活躍していたことが解き明かされた。章末において、今後の課題が示されている。著者はカナダ日本人移民史において、自由移民と契約移民が個別に論じられてきたことを指摘しつつ、契約移民からの転業を含めた水産業における日本人移民の転業をあげ、さらに水産業から他産業への転出についても課題として提示している。本書全体を通じて、歴史地理学をベースにしているだけに豊富な地図、詳細な家系図の提示や広範囲におよぶ緻密な現地調査に基づく資料が随所に用いられている。本書の主題は水産業ではあるが、これに偏ることなく日本人移民の日常生活史(第 7 章)についても触れている点は興味深く、バランスのとれた章構成となっている。

ここで評者から個人的な感想を述べてみたい。カナダの日系人たちは、第二次世界大戦中、敵性外国人としてみなされ、ロッキー山脈内の収容所での生活を余儀なくされた。終戦後、収容所からは解放されたが、1949 年になるまで西海岸に戻ることは許可されなかった。よって、西海岸での生活の再建を断念した日系人も多かったことは事実である。もし、第二次世界大戦中の強制移住がなかったら、日系人はカナダ西海岸の水産業の振興に、より一層寄与できたであろう。同地域において、日本人移民たちによって培われてきた水産業に関する技術が伝承され、進展していたに違いない。同時に日系人は、小規模ながらも多民族が居住する漁村およびその周辺地域での融和的発展に貢献することができたのではなかろうか。このように本書を通じて学ぶ点は多岐にわたる。

一般的にこれまでの移民研究分野においては、アジアからの初期移民に関して、白人の資本家から低賃金で雇用される苦役労働者の視点で論考する研究が顕著であり、そこには、差別、排斥というキーワードが列記されている。日本人移民が新しい漁場を開拓

し、一時的にはあるが、塩ニシンにおいては独占的立場であったことは、特筆すべき点である。カナダ政府側からのさまざまな厳しい制約がある状況下で、逆境を克服していく日本人移民は、逞しく紛れもなく開拓者であったことがこの著書を通じて確認できる。著者の熱い研究者魂を随所に垣間見られる力作であり、研究者のみならず多くの読者に薦めたい一冊である。

(にわやま ゆうきち 武蔵大学他非常勤講師)